

## 五輪というダークファンタジー

毎日 25 日「島田雅彦さん特別寄稿」に目がとまった。作家島田雅彦さんらしい鋭い指摘を記録したくなった。抜粋して紹介したい。

終戦から 19 年後に開催された 64 年東京大会は、日本が人権、民主を尊ぶ普遍的国家として国際社会に復帰したことをアピールし、戦後復興と経済成長の成果を謳いあげる祭典としての大義はあった。強引な開発による弊害もあったが、大会をさらなる発展の起爆剤にする「成長期のオリンピック」だった。それに対し、今次大会は大義もなく、成長も見込めない、関係者の利権配分のためだけに実施される、時代錯誤の「終末期のオリンピック」である。

振り返れば、今大会は誘致の段階から不正と虚偽のオンパレードだった。ロビー活動での賄賂疑惑、新国立競技場建設過程でのゴタゴタと予算膨張、エンブレム盗作疑惑、猛暑問題、組織委の予算濫費、会長の女性蔑視発言、不適切な開会式演出プランや人選、IOC の拝金主義とぼったくり、委託事業者による中抜きなど、オリンピックのダークサイドがこれでもかというくらい露呈した。

逆説的な意味において、歴史上、最も成功したのは 1936 年の第 11 回ベルリン大会だったのかもしれない。

ナチス独裁政権下のオリンピックは、反ユダヤ主義政策や他国の侵略計画を巧みに隠蔽しつつ、アメリカの商品広告の手法を駆使し、古代ギリシャとナチスのイメージを結び付けるために聖火リレーという儀式を編み出し、競技を通じてアリア人種の優位性を誇示した。露骨なオリンピックの政治利用はここから始まったわけだが、アメリカも近代オリンピックの創始者クーベルタンもナチスの接待と宣伝工作に乗せられ、ボイコットの声を封殺した。その 4 年後には日本が「紀元二千六百年記念行事」としてベルリン大会を模倣しようとするが、日中戦争拡大により幻となる。

今回も誘致段階で、安倍前首相が福島原発事故の「アンダーコントロール」発言をし、「復興五輪」の建前で国際世論を欺いたが、その隠蔽手法も「ナチスに学んだ」のだろう。復興は後回しにされ、仲間内で大政翼賛への回帰を夢見る「復古五輪」にすり替えられた。菅首相の「コロナに打ち勝った証し」発言も「安全安心」発言も、現実離れた妄言だったが、IOC も東京都もその妄言に便乗し、オリンピックの黒歴史を反復した。オリンピックには常にナチスの影が付きまとうので、それを払拭するための努力を怠った途端、差別や蔑視、独善の体質が透けて見える。

今大会で噴出した諸問題のほとんどはこれまで積み重ねてきたことの結果であり、ツケである。当初予算の 4 倍、ロンドン大会の 2 倍の予算を濫費しながら、しょぼさを感じてしまうのはなぜか？ 感染対策の不備、運営上の混乱、選手村のみすぼらしさを見るにつけ、予算の使途に大きな疑念を抱く（もっと紹介したいが、このへんで）。

(2021 年 7 月 28 日)